『語学教育研究論叢』第 34 号

雑誌『スタイル』初期にみる 宇野千代のきものの美意識

青木　淳子

The Appearance of Chiyo UNO's Japanese Kimono Aesthetic in *Style* Magazine

AOKI Junko

Style magazine, first published in June 1936 by novelist Chiyo UNO, introduced western style clothing to Japanese readers. However, it also included some articles about Japanese kimono. There were many photos of chic Geishya girls. Chiyo wanted to influence trends in kimono fashion. She advocated the use of western cloth in kimono and obi. This required people to change their traditional ways of thinking about kimono, such as what materials are appropriate for making kimono and how to put on kimono. Some famous writers and artists admired Chiyo's kimono aesthetic. Chiyo's new kimono aesthetic was established among the readers of *Style* magazine. Evidence for this come from the magazine's correspondence column. This aesthetic formed the basis of Chiyo's activity to create a new kimono aesthetic after the Second World War.

1. はじめに：目的と先行研究

雑誌『スタイル』は 1936（昭和 11）年 6 月に、作家宇野千代[1)]が編集長となりスタイル社から創刊され、1941（昭和 16）年 9 月まで発行された[2)]。

戦後、1946（昭和21）年に復刊し、1959（昭和34）年にスタイル社の倒産によって廃刊した。

『スタイル』は「いかにおしゃれな生活をするか」をテーマとし、『都新聞』の記者であった北原武夫[3]が編集に協力した[4]。『スタイル』は「表紙を開くと、ぴんと背筋を伸ばした外国人モデルがあらわれる。また旬のドレスや靴、髪型が写真やイラストで紹介され、最新のトレンドがレポートされる[5]。」と、一般に、西洋のファッションの紹介の部分に着目されている。しかし、宇野千代は、戦後、作家としてだけではなく、着物デザイナーとしても注目され、成果をあげた[6]。戦後『スタイル』復刊後の1951（昭和26）年には臨時増刊号として『きもの読本』を発行し、「有名女優や女流文学者に豪華絢爛な着物を着せ」、「コーディネートの指南をしたり、常識やしきたりにとらわれない自由な着こなし[7]」を提案した。また、1961（昭和36）年には銀座に「宇野千代のきものの店」を出店[8]した。

本稿では、宇野千代が着物デザイナーとして活躍する以前の、戦前に発行された『スタイル』に掲載されたきもの関連の記事を資料とし、洋装を提案したと見なされている雑誌『スタイル』に内在するきものについての千代の美意識がどのようなものであるのかを、明らかにする。そしてそれが後年、着物デザイナーとして活躍する宇野千代の創作とどう繋がっていくのかを、考察する。

研究の分野では宇野千代について、従来作家として視点が置かれてきた。その研究動向については、尾形明子によって丁寧にまとめられている[9]。尾形は、佐伯彰一が「『可愛い女』の私離れ[10]」はまとまった宇野千代論になっており、雑誌『スタイル』に東郷青児[11]、「刺す」「雨の音」に北原武夫を通したラファイエット夫人、「淡墨の桜」に小林秀雄[12]を通したドフトエフスキーの影響をみることができる、と指摘している点[13]を評価している。直接的に『スタイル』を取り上げた論文には笹尾佳代の「宇野千代における〈装い〉の意味―雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって[14]」がある。笹尾は創刊翌年の1937（昭和12）年以降は北原が編集に大きく関与してい

るため、千代の意図が編集に表象されているのは創刊期であるとした。『スタイル』の編集はファッションを直接先導するものであり、千代自身による自己の表象である[15]、と述べている。笹尾のこの指摘を援用し本稿では、『スタイル』創刊から一年を分析の対象とする。これらの他に、千代の処女作であり、化粧や装いに関する考えと大きく関連している文学作品「脂粉の顔」についての考察が林円、青野はるか、芝野美奈代によってなされている[16]。本稿ではこれらの研究の成果も鑑みながら、論考していく。

2.1 雑誌『スタイル』ときもの関連記事

本稿では、1.2で述べた理由から、創刊の1936（昭和11）年6月号から1937（昭和12）年6月号までの13冊を調査対象とする。『スタイル』は巻頭グラビアに洋装女性やハリウッド女優の写真を掲載し、一見、洋風のファッション雑誌という印象が強いが、創刊2号から和服関連の記事がコンスタントに掲載されている。1936（昭和11）年12月号の編集後記で千代は「当分の間は32頁のグラビアを洋装に16、男ものに4、和装に8、お化粧に4という風に割当てて行きたい[17]」と編集方針を述べている。グラビアにして32頁のうち8頁ということで、25パーセントという大きな割合を和装に費やす方針であるところから、千代の和装に対する興味の大きさが推察できる。

2.1.1 全体からみた数的調査と分析

本稿を執筆するにあたり、1936年6月号から1937年6月号までの一年間の各号について[18]、和装関連の記事を抽出し、項目別に分類し、エクセル表にまとめた。記事の分類は、着物を着用した女性の「写真」、きものに関するきもの評論家や著名人らの「随筆」、きものの知識に関する「記事」、きもの関連の「読者」の欄、と4つに分類した。その数を集計したのが、表1.『スタイル』1936年6月号～1937年6月号のきもの関連記事数である。

筆者が抽出したきもの関連記事は一年間で総数162件であった。そのうち写真をメインにしたものが63件で38.9%、随筆が41件で25.3%、記事が

27 件で 16.7%、読者欄が 31 件で 19.1% という結果となった。雑誌『スタイル』でのきもの情報は、写真という視覚的情報が主に伝えられ、それに次いで随筆という形で、きものに対する意識が表出されていた、と考えることができる。勿論、きものに関する実用的な記事もあった。さらに、きものに対する読者の意識も分かる欄があったことも重要ではないだろうか。

表 1　『スタイル』1936 年 6 月号～1937 年 6 月号のきもの関連記事数

	年月（号）	写真	随筆	記事	読者	（計）
1	1936 年　6 月	0	0	0	0	0
2	1936 年　7 月	1	1	1	0	3
3	1936 年　8 月	4	2	1	0	7
4	1936 年　9 月	6	1	1	0	8
5	1936 年 10 月	5	1	4	2	12
6	1936 年 11 月	3	8	0	0	11
7	1936 年 12 月	9	1	6	0	16
8	1937 年　1 月	5	3	4	1	13
9	1937 年　2 月	8	2	2	1	13
10	1937 年　3 月	6	3	3	5	17
11	1937 年　4 月	3	6	2	10	21
12	1937 年　5 月	6	5	1	9	21
13	1937 年　6 月	7	8	2	3	20
	（計）	63	41	27	31	162

2.2　質的分析

次に、写真、随筆、記事、読者欄の内容について、それぞれ内容を精査し、分析する。

2.2.1　写真

写真記事は全部で 63 件であるが、そのうち下駄やハンドバッグなど物の写真記事が 5 点あった。ここでは装いに焦点をあて検討するため、人物情報

としての写真記事 58 点について精査する。表 2 が、人物写真一覧である。属性についてみてみると 58 点のうち、芸妓の写真が 20 点、富裕層や有名人の令嬢の写真が 19 点、モデルを使用したものが 6 点、女優が 4 点、有名人の夫人が 2 点、婦人（未婚既婚情報無し）が 2 点、その他、芸術家、作家、舞踊家、編集者が 1 点ずつであった。なお、さらにマネキンが 1 点あったが、これも人形（ひとがた）を成すということで人物写真の分類に加えた。

表 2 『スタイル』1936 年 6 月号～1937 年 6 月号の人物写真一覧

	年月	頁	人物（撮影者）	種類	着物	帯	髪型
1	193607	n	宮川曼魚令嬢静子	令嬢	木綿・格子	横縞	日本髪
2	193608	n	柳橋　松千代田　榮美子（福田勝治）	芸妓	縮緬浴衣茄子紺	白献上柳	日本髪
3	193608	n	柳橋　松千代田　榮美子（福田勝治）	芸妓	平絹源氏模様お納戸地	絽献上	日本髪
4	193608	n	仲田菊代・二科会画家（福田勝治）	芸術家	白絣格子	矢羽根	束髪
5	193608	n	山根壽子　文化学院女学部 3 年	令嬢	盛夏お納戸地白の渦巻き	洗い朱水と花菱	断髪
6	193609	n	神楽坂　まり子	芸妓	藤の大柄濃地に白	白地に描絵	束髪
7	193609	n	二筋堂　けい子	芸妓	平絽・お納色・縫目に白荒磯	金茶・茶献上	日本髪
8	193609	n	新橋　河辰中　せき弥（福田勝治）	芸妓	絽縮緬・露芝・撫子・濃地に白	白地青・朱刺繍丸帯	束髪
9	193609	n	女優（不詳）	女優	市松・濃地	白	束髪
10	193609	n	花柳寿美（FUKUDA）	舞踊家	絽袷・紅葉と桜藍地	青磁・金泥の破れ傘	束髪
11	193609	n	モデル	モデル	つづれ織絹物格子チョコレート色に珊瑚色の濃淡	カーテン地（高島屋）木綿織物	束髪
12	193610	35	○菊さん（福田勝治）	芸妓	中振袖・藤・蝶	羊歯・丸帯	日本髪
13	193610	37	赤坂　森清土　森千代（名越辰雄）	芸妓	黒地小浜縮緬・白、黄、藍の波模様	花柄	日本髪
14	193610	1	入江たか子（名越辰雄）	女優	黄八丈	黒繻子	束髪

15	193610	33	小島みつ子夫人 （名越辰雄）	夫人	紺地の小浜縮緬にねづみの木目模様	とっこの袋帯	束髪
16	193610	38	医学博士　河野勝斎氏令嬢綾子	令嬢	黄八丈袷	花模様の板締めと黒繻子との染帯	日本髪
17	193611	43	赤坂　林屋　小金	芸妓	一越縮緬白とお納戸	献上丸帯	日本髪
18	193611	41	大野あゑ子	婦人	うす藤色地に紫の矢絣もよう	博多	パーマネント
19	193611	38	宇戸政子（中山正一）	編集者	藤紫地に菊と秋草小浜縮緬	紅葉を大きく刺繍。丸帯	束髪
20	193612	37	林屋　幸弥	芸妓	紅葉狩。振袖。綸子納戸地。	n	日本髪
21	193612	38	新橋　玉長 （名越辰雄）	芸妓	紅葉	波	日本髪
22	193612	33	松竹大船　桑野通子	女優	黒の変り織りクレープ黄赤緑の小花プリント	黄と紺の太い縞。デッキチェアの生地	パーマネント
23	193612	24	モデル	モデル	小紋	n	パーマネント
24	193612	34	川添ふく子	令嬢	りんず縮緬のきものと対のちゃんちゃんこ。	n	断髪
25	193612	34	川添ふく子	令嬢	大島とちゃんちゃんこ。	n	断髪
26	193612	34	モデル	令嬢	訪問着	n	パーマネント
27	193612	35	瀧田菊江 （林田武衛）	令嬢	紅地振袖。百人一首柄。	白地	パーマネント
28	193612	36	瀧萬令嬢　武原幸子	令嬢	鼠色古代綸子。さび朱の裏。	濃茶金銀飛び模様。	日本髪
29	193701	45	新橋　秀美 （名越辰雄）	芸妓	黒紋付	丸帯	日本髪
30	193701	47	モデル	モデル	雲と縞。振袖	白地	パーマネント
31	193701	50	モデル（園尾美子） 美容着附（早見君子） 衣裳（白木屋）	モデル	フランス好み刺繍。綸子縮緬濃臙脂。230円	錦丸帯198円	パーマネント
32	193701	46	衣笠八重子さん （林田）	令嬢	お納戸地麻の葉。お召し。	n	日本髪
33	193701	48	谷崎潤一郎令嬢 鮎子	令嬢	お納戸縮緬しだれ梅	n	日本髪

34	193702	46	大阪南地　富田屋 小黒榮	芸妓	小浜縮緬。白茄子紺染分け。	白地に鞠。	日本髪
35	193702	47	大阪南地　富田屋 二三子	芸妓	黒地錦紗。友禅。	赤白銀糸大輪菊	日本髪
36	193702	47	新橋　久辰中　お蔦	芸妓	襟付き。藍がえし地色小菊。	古代紫吉原つなぎ	日本髪
37	193702	48	新橋　久辰中　お蔦 （ポーズ違い）	芸妓	襟付き。藍がえし地色小菊。	古代紫吉原つなぎ	日本髪
38	193702	44	山崎澄江	令嬢	お召。ぼかし縦縞。花。	白地。草花。	日本髪
39	193702	44	由利春子	令嬢	訪問着。白鶴綸子縮緬。	黒糸錦。	束髪
40	193702	45	藤野とみ子	令嬢	綸子絞り重ね色紙。	花菱。白地。	断髪
41	193702	45	藤野豊子	令嬢	綸子絞り重ね色紙。	花菱。白地。	束髪
42	193703	37	柳橋　松千代田　榮美子 （名越辰雄）	芸妓	振袖。綸子。梅	黒地	日本髪
43	193703	39	モデル：園尾美子 調整：白木屋呉服店 着付：　早見君子	モデル	匹田絞り。四季花。	黒地。金。	パーマネント
44	193703	39	モデル：松本キミ子	モデル	総絞り	n	パーマネント
45	193703	38	石川憲子	令嬢	振袖。薔薇。	白地。七宝丸帯。	パーマネント
46	193703	38	石川富美子	令嬢	振袖。薔薇。	白地。丸帯	パーマネント
47	193703	38	大嶺節子	令嬢	振袖。四季花。	黒地亀甲。	パーマネント
48	193704	45	新橋　金三升　百合子 （名越辰雄）	芸妓	小紋（細枝に小花）	白地	日本髪
49	193704	47	新興キネマ 御影公子	女優	扇面絞り柄	濃地草花	パーマネント
50	193704	46	マネキン 〔島津マネキン〕	マネキン	縞	白地	パーマネント
51	193705	45	新橋　久辰中　小六	芸妓	江戸紫縮緬黄桃白菊抜き	錦丸帯	日本髪
52	193705	56	赤坂　林屋　君子	芸妓	綸子総模様	丸帯花柄	日本髪
53	193705	46	吉屋信子	作家	横縞紬	市松	断髪風
54	193705	49	長谷川松子	夫人	黒紋付	白地	日本髪
55	193705	48	鈴木小町	婦人	濃地に桜	白地	束髪

56	193706	45	赤坂　福弥 (名越辰雄)	芸妓	柳葉散らし	大輪花丸帯	日本髪
57	193706	49	河野綾子	令嬢	麻の葉	黒地	束髪
58	193706	56	宮川静子 (名越辰雄)	令嬢	紺地ノ金紗に白い井桁模様	こげ茶に渋い格子	日本髪

※ 1936年9月号までは冊子自体に頁数が記載されていないためそれまでに発行された号の頁数はn（noneの略）とした。また、帯についてもポーズや写り方によって色や柄が識別できないものは、nとした。

『スタイル』は西洋のファッションを提唱した雑誌というイメージが強いが、実際にきもの関連の写真記事を調査してみると、芸妓の写真が一番多く掲載されていた。明治初頭、芸妓は流行をリードしたといわれており、その当時に雑誌に掲載されるのであれば順当であるが、『スタイル』は1936（昭和11）年創刊である。ここに、編集者のきものに対する基本的な考えが表出していると考えることができる。つまり、近代のさきがけを標榜する雑誌であっても、そこに掲載するきものは芸妓の「粋[19]」を大事にした、といえるのではないだろうか。シネマ全盛だった当時にもかかわらず、きもの姿は「芸妓」が一番だという考えであったと推察できる。表2の1、2番である柳橋松千代田の芸妓、榮美子は「深水に夏ものを訊く」という題で全身写真が2枚掲載されている。日本画家、伊東深水[20]の推薦である。「伊東深水氏推奨の佳人。楚々とした優姿はそのまま白い芙蓉の花[21]」とキャプションに述べられている。着用しているきものの柄である源氏香は、源氏物語を元にして香の世界で培われた柄であり、教養をも感じる通好みの柄である。芸妓は日本髪であるので、他の外国人の映画スターが登場する洋装の頁と対照をなす雰囲気が誌面に醸しだされている。

次に多かったのが令嬢である。芸妓が粋なきもの姿を提示したのに比較すると、令嬢は二種類に大別できる。古典的なきものを着用する昔ながらの令嬢と、新しい感覚のきものを着用する令嬢である。1937（昭和12）年1月

号掲載の表2の32番衣笠八重子は、日本髪を結い、「今日はお正月、歌留多会へお出掛け」と説明されている。八重子は「浅草名代の入船せんべい」の令嬢である。「この明眸皓歯のあどけない微笑は、どんなにお客さまの心を明るくさせることでせう[22)]」と表現され、切れ長の眼が昔ながらの美人である。一方、表2の45番、石川憲子は、髪型はパーマネントで、着用している振袖は、薔薇を大胆に描いたモダンな振袖である。「女子学習院卒業後、御趣味は舞踊とピアノ、手芸にもまた大変ご堪能の由[23)]」と説明されている。髪型はパーマネントでしっかりした面差しが現代的美人という印象を与える。

しかし、何といっても『スタイル』らしい新しい印象のきものを提示したのは、女優である。表2の22番、松竹大船の女優、桑野通子が着用したのは、「黒の変わり織りクレープに眼もあやな黄赤緑のプリント花模様、ヤール巾の洋服地を仕立て上げた新しい試み。」ときものの説明がある。帯は「思ひきつた黄と紺の太い縞、あのデツキチエアに張るコワイ布」である。実はこのきものは意匠が宇野千代とされている。「この大胆な色調の素晴らしさは、どんな豪奢な織物の帯にも負けない積りです。新しいキモノは、何ででも。—あなたのお好きな布地で、どうぞご自由に[24)]。」と説明されている。襟足まで下ろしたパーマネントの髪が自然で、宇野千代が提唱する「新しいキモノ」をごく自然に見せている。花柄の半襟がかけられ、きものの可愛らしさが引き立っている。昭和11年という時代を考えると、洋服地で作成するということは新しい感覚である。女優だからこそ着こなせたのかもしれない。

また他に、表2の10舞踊家花柳寿美[25)]、表2の4二科会画家仲田菊子など、きものの着こなしの素養を持った人物も掲載されている。さらに表2の53作家の吉屋信子[26)]も登場している。きものは横縞の紬、帯は市松、丈長の羽織という通な装いである。「たつた一枚ある最近の私の和服姿」と説明にあり、普段は洋装の作家がめったに着ない和装で登場するところに『スタイル』のきもの頁の面白さがあったといえる。

2.2.2　随筆

随筆は全部で41点、コンスタントに掲載されている。1936（昭和11）年7月号から毎号のように、計12点執筆したのが随筆家の森田たま[27]である。過去に会った素敵なきもの姿の女性のことを回想風に書く事が多かったが、1936（昭和11）年8月号、1937（昭和12）年5月号には宇野千代のきもの姿について記述している。「お手本」と題した1936年7月号では「黒い着物に黒い帯、黒い日傘、黒い草履をはいて、胸にかかへたハンドバツグの燃える紅と足袋の白さがぱつと眼を射た」と、夏にあえて黒い装いをした千代の印象深さを述べ「黒のさつま上布に黒繻子の帯をきりりと結んでおられたのである」と素材の説明をしている。夏帯は絽や紗が一般的であるのに繻子帯を締める千代の装いに「黒繻子の帯はつやつやと濡れたやうに光つてゐて、さつま上布とおなじ手ざはりが感じられる[28]」と、一見季節はずれの黒繻子を擁護するような表現である。裕福な家庭に育った[29]たまは、きもののしきたりにも詳しく、また紬など通好みの趣味であったと思われる。そのようなたまでさえ、夏の黒繻子の帯が涼しげと思わせる、千代のきものの着こなしは独特であったと思われる。また、1937（昭和12）年5月号では「緑の着物」と題し、「三月弥生の中頃にお眼にかかつた宇野さんの、新しい和服の好みがいつまでも眼にちらついて離れない」と、普通着こなしの難しい緑のきものについて述べられている。また「木綿がはいつているのでせう」と「その手ざはりはどこにもない。しつとりと落着いた、しかも軽やかな感じである」ときものの色柄だけでなく感触についても述べられている。このようなたまの豊かな筆致を通して、読者は宇野千代の独特のきものの世界にふれることができたと思われる。

随筆は他に、著名な作家、画家達が名を連ねている。

表 3 『スタイル』（1936 年 6 月～1937 年 6 月）にきもの関連の随筆を掲載した著名人

	年月号	頁	氏名	随筆題名
1	1936 年 11 月	39	萩原朔太郎[30]	角かくしの色
2	1936 年 11 月	40	長谷川時雨[31]	帯
3	1937 年 1 月	47	岡本かの子[32]	和服次第書き追憶
4	1937 年 2 月	6	横光利一[33]	着物
5	1937 年 3 月	34	鏑木清方[34]	娘のこのみ
6	1937 年 5 月	4	村岡花子[35]	着物の感情
7	1937 年 5 月	48	林芙美子[36]	飛白のきもの

表 3 より、当時の宇野千代の人脈の広さをうかがい知ることができる。

2.2.3 きもの解説記事

きものの解説のための記事は全部で 27 点と少ない。このことから、『スタイル』のきもの記事では、実用というより、イメージが先行していたことがわかる。しかし、解説記事の執筆者で記名のものは、宇野千代が一番多く 6 点であった。

表 4 『スタイル』（1936 年 6 月～1937 年 6 月）における宇野千代のきもの解説記事

	年月号	頁	記事題名	着物・帯・解説
1	1936 年 7 月	n	みをつくし	帯は幅巾ものカーテン地で作ったもの。くすんだ桃色に淡墨をまぜたゆたかな濃い色。
2	1936 年 10 月	33	新しい日本の着物	これまでのあんまり四角ばつた習慣を、思ひきり破つた、自由なキモノを、もう一度着直してみる。

3	1936年10月	34	黒繻子	日本の着物ももう一ぺん、凡ての規則をなくして、もみくしゃにして了つて、勝手なものを勝手な風に着てみる。
4	1937年2月	50	下駄の古典調	形は古風な後円。‥めもあやな江戸紫の色のよさ。流行のスクエア・シューズの粋を忍ばせる
5	1937年4月	47	新しいセルのキモノ	セルの着物の替りに、特色のある洋服地のウールの単衣を着てみようとお思ひになりませんか
6	1937年6月	47	新しい木綿の単衣地	東洋的な渋い色調とアメリカ・インディアン風の強烈なものがごっちゃになっています。

表4から宇野千代のきものに関する主張を読み取ることができる。従来のきものについての慣習つまり「しきたり」を脱し、新しい感覚で取り組み、素材については、洋服の生地を用い、色や柄は洋風の取り合わせを採りいれる、ということである。それを、着物と帯だけでなく、下駄などの小物も含めて、大改革を提唱していることが判る。

2.2.4　読者欄

読者欄は「Q et R」と題し読者からの質問コーナーが、創刊から数えて5号め1936（昭和11）年10月号から始まった。勿論、きもの関連だけでなく、むしろ洋服に関する項目の方が多かった。しかし、徐々にきもの関連の項目も増え、1937（昭和12）年3月号では「Q et R 和服科」と着物関連のコーナーができ、質問も多く掲載された。和服関連は全部で31点。回答者は森田たま、小寺菊子[37]が各7点と多く、着物と帯、襦袢との素材、色、柄の取り合わせについての質問が多い。また、着付けについては早見君子[38]が2点、回答している。コートやショールなどの付属品については山脇敏子[39]が2点、回答している。他に、草履は銀座の京屋、布地は銀座のストック商会など、店舗が回答している例もある。各回、小さいコーナーではあるが、読者がきもののどのような所に興味を持っていたかが判り、また実践的な回答で

当時のきものをとりまく状況を推察することができる。いわば『スタイル』をめぐるオーディエンスを明確にすることができる。

1937（昭和 12）年 5 月号にはいくつか興味深い質問がある「青味がかつた黄色とあまり派手めでないエンヂの縞セルを買つたのですが、帯についてRをいただきたう御座います。洋服地で作りたいと思つてゐます。」「花模様のデシンで和服が作りたいのですが」といったものである。これらの質問を読むと、そこには、宇野の提唱する新しいきものを取り入れたいが、なかなか感覚をつかむことができない読者像をみることができる。しかし、これらの質問から、読者達の意識は確実に、宇野の提唱する新しいきものに向かっていたと推察できる。

3. まとめ

雑誌『スタイル』は巻頭に外国人映画俳優の洋装写真を掲載したものと、洋風のイメージで捉えられてきたが、本稿によって、和服関連の記事も掲載されていたことを明らかにした。そこには、和服の着こなしの基本としての、日本髪の粋であでやかな芸妓の姿が毎号掲載されていた。つまり、きものの美意識の根底には日本の江戸時代から続く「粋（いき）」があった。しかし、編集長であった宇野千代は、洋服生地できものを、カーテン生地で帯を仕立てるなど、新しいきものの形を提唱した。そこには、形だけではなく、素材、つまり着心地へのこだわりもあった。『スタイル』誌上では令嬢はモダンな柄のきものを着用し、女優は洋服に使われるプリント地の着物を着て微笑んだ。しきたりや慣習を重んじるきものの世界ではあったが、著名な作家や芸術家らが宇野の新しいきものを評価する随筆を寄せることによって、宇野の提唱する「新しいきもの」という言説が『スタイル』誌上に確立したのではないだろうか。創刊後一年余りで、読者からも宇野の新しいきものスタイルについての問合せが来るようになった。西洋の最先端のファッションを掲載した雑誌『スタイル』に掲載されたからこそ、その新しいきものの提案も、読者はより魅力的なものとして受け入れることができたのかもしれない。そ

れは従来のきものの感覚からは逸脱するものであった。しかし、当時の随筆家の賛同や賛美、読者の評価によって、宇野は新しいきものへの確信を得ることができた。それが、しきたりを重んじるきものの世界において、宇野が戦後、その枠（わく）をこえて活躍する精神的礎になったと考えることができる。

【Endnotes】

1) 宇野千代。山口県出身。1897（明治30）年～1996（平成8）年　作家、随筆家。着物デザイナーとしても知られる。
2) 戦時中は『女性生活』と改題し、スタイル社は文体社と名前を変えた。（宇野千代 2013年『生きて行く私』角川文庫 p147（1992年　中央公論より刊行）
3) 北原武夫。神奈川県出身。1907（明治40）年～1973（昭和48）年。作家。1939年宇野千代と結婚。1964年に離婚。
4) 1993年『新潮日本文学アルバム47　宇野千代』新潮社　p36
5) 宇野千代・小林庸浩ほか2013年『宇野千代　女の一生』新潮社 p62
6) レブン編集・執筆　2006年『決定版　宇野千代の世界』ユーリーグ p83には「千代のデザインしたきものは、吉永小百合、山本陽子、十朱幸代がセレモニーや舞台で袖を通し長く親しまれた」とある。
7) 宇野千代・小林庸浩ほか2013年　前掲書　p70
8) 1993年『新潮日本文学アルバム47　宇野千代』p60
9) 尾形明子1999年「研究動向　宇野千代」『昭和文学研究』第28集　昭和文学会 pp121-125
10) 佐伯彰一1996年「「可愛い女」の私離れ」『文学界』文藝春秋社　pp124 － 129
11) 東郷青児（1897（明治30）年～1978（昭和53）年）は当時パリ帰りの画家であり、千代とは1930（昭和5）～1934（昭和9）年まで同棲した。
12) 小林秀雄1902（明治35）年～1983（昭和58）年。文藝評論家、作家。
13) 尾形明子1999年　前掲論文　p123
14) 笹尾佳代2011年「宇野千代における〈装い〉の意味－雑誌『スタイル』編集と「あいびき」をめぐって」『国文学論叢』第56号　龍谷大学国文学会　pp34-47

15) 笹尾佳代 2011 年前掲書　p35

16) 林円 2001 年「宇野千代「脂粉の顔」論―化粧と素顔の間―」『東洋大学大学院紀要』第 37 集 pp57-72、青野はるか 2002 年「宇野千代・装いを変える時―「脂粉の顔」「失楽の歌」―」『武蔵野女子大学大学院紀要』第 2 号 pp25-32、芝野美奈代 2009 年「宇野千代「脂粉の顔」論」『国文鶴見』第 43 号鶴見大学日本文学会　pp41-49

17) 宇野千代「編集後記」『スタイル』時事新報社　1936 年 12 月号　p32. この編集方針については、笹尾（2011：36）でも指摘されている。

18) 創刊号の 1936 年 6 月号にはきもの関連のグラビアや記事が無いため、1936 年 7 月号から 1937 年 6 月号まで 12 冊を実質の調査対象とした。

19) 粋とは哲学者九鬼周蔵によると、「垢抜けして（諦）、張りのある（意気地）、色っぽさ（媚態）」（1979 年『いきの構造』岩波文庫）とされる。

20) 伊東深水。1898（明治 31）年～1972（昭和 47）年。日本画家。

21)『スタイル』1936 年 8 月号　グラビア

22)『スタイル』1937 年 1 月号　p46

23)『スタイル』1937 年 3 月号　p38

24)『スタイル』1936 年 12 月号　p33

25) 初代花柳寿美。1898（明治 31）年～1947（昭和 22）年。日本舞踊家。

26) 吉屋信子。1896（明治 29）年～1973（昭和 48）年。作家。

27) 森田たま。1894（明治 27）年～1970（昭和 45）年。随筆家。

28)『スタイル』1937 年 8 月号

29) 紅野敏子郎 1997 年「「学燈」を読む(98)―森田たま」『学燈』4 月号 p58　森田たまは 1894 年札幌生まれ。父岡村作右衛門は札幌共同運送株式会社の社長。

30) 萩原朔太郎。1886（明治 19）年～1942（昭和 17）年。詩人。

31) 長谷川時雨。1879（明治 12）年～1941（昭和 16）年。劇作家。小説家。

32) 岡本かの子。1889（明治 22）年～1939（昭和 14）年。小説家。歌人。

33) 横光利一。1898（明治 31）年～1947（昭和 22）年。小説家。俳人。評論家。

34) 鏑木清方。1887（明治 20）年～1972（昭和 47）年。日本画家。

35) 村岡花子。1893（明治 26）年～1968（昭和 43）年。翻訳家。児童文学者。

36) 林芙美子。1903（明治 36）年～1951（昭和 26）年。小説家。

37）小寺菊子。1884（明治 17）年～1956（昭和 31）年。小説家。

38）早見君子。1889（明治 22）年～没年不詳。美容師。（「三二年代表女流名鑑グラフ『婦人画報』1932（昭和 7）年月号 p283 より」

39）山脇敏子。1887（明治 20）年～1960（昭和 35）年。洋画家。服飾手芸家。